



TITLE:

財政學の基本問題

AUTHOR(S):

大谷, 政敬

CITATION:

大谷, 政敬. 財政學の基本問題. 經濟論叢 1937, 44(5): 182-200

ISSUE DATE:

1937-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130944>

RIGHT:

神戶博士
還曆祝賀

記念論文集

京都帝國大學經濟學會

昭和十二年五月一日發行

經濟論叢

第四十四卷 第五號

(通案第二百六十三號。禁轉載)

奉
呈

神戶正雄先生

執筆者一同

目次

| | | | |
|-----------------------------|-------|--------|----|
| 滿洲移民の特異性と掃匪問題 | 法學博士 | 山本美越乃 | 一 |
| 農家の負債と負擔能力 | 法學博士 | 河田 嗣郎 | 二〇 |
| 現代社會學に於けるパレット社會學の地位 | 文學博士 | 米田庄太郎 | 三〇 |
| 幕末の商稅論 | 經濟學博士 | 本庄榮治郎 | 三〇 |
| 實際政策と政策原則 | 經濟學博士 | 作田 莊一 | 三六 |
| 『維新の詔』に於ける變革の國是 | 經濟學博士 | 石川 興二 | 三九 |
| シュレーデルの王室金庫論 | 經濟學士 | 小山田 小七 | 七〇 |
| アダム・スミスに於ける自由主義社會の概念的構造に就いて | 經濟學士 | 中川與之助 | 二三 |
| 工場内勞働者教育事業の目的 | 經濟學士 | 大塚 一朗 | 二九 |
| アフタリヨンの貨幣心理說に就いて | 經濟學士 | 松岡 孝兒 | 一〇 |
| 明治初年の官營産業に就いて | 經濟學士 | 堀江 保藏 | 一四 |
| 財政學の基本問題 | 經濟學士 | 大谷 政敬 | 一八 |
| 取引所實物化論と短期清算取引の應用に就いて | 經濟學士 | 今西庄次郎 | 三〇 |
| 貨幣の中立性に關する一考察 | 經濟學士 | 中 谷 實 | 三八 |
| リストの國民生産力說 | 經濟學士 | 白杉庄一郎 | 三四 |
| 財政學と經濟政策論との交流 | 經濟學士 | 島 恭彦 | 三六 |

| | | |
|-----------------------|-------------|-----|
| 生産の構造と貿易 | 經濟學士 松井 清 | 三六九 |
| 租税の農業に及ぼす影響 | 經濟學士 山岡 亮一 | 一八六 |
| 再保險と共同保險との接近 | 經濟學士 佐波 宣平 | 三〇三 |
| 耕地管理組合に就いて | 經濟學博士 八木芳之助 | 三三五 |
| 熊澤蕃山研究序説 | 經濟學博士 黒 正 巖 | 三三六 |
| 水産經濟學と其の課題 | 經濟學博士 蜷川 虎三 | 三五二 |
| 輸入制限と國內物價との關係 | 經濟學博士 谷口 吉彦 | 三六三 |
| 昭和の税制改革 | 經濟學博士 汐見 三郎 | 三八五 |
| 自然利子論 | 文學博士 高田 保馬 | 四〇七 |
| 財政學者の鐵道經濟に關する研究論著に就いて | 商 學 士 武藤 長藏 | 四四四 |
| 現段階に於ける租税體系 | 經濟學博士 土方 成美 | 四七七 |
| 支那南北辨 | 法學博士 財部 靜治 | 四九七 |
| 赤字公債の消化 | 經濟學博士 小島昌太郎 | 五二三 |

財政學の基本問題

大谷政敬

| | | | | | |
|----|----|---------|-------------|---------|----|
| 目次 | 序言 | 一 對象と認識 | 二 財政學の對象の領域 | 三 財政の本質 | 結言 |
|----|----|---------|-------------|---------|----|

序言

凡ゆる科學にとつて、その對象を如何に認識し、如何に規定すべきであるか、而してその對象の本質は何にもとむべきであるかといふ問題は、最も重要な基本問題といふべきであらう。しかるに我が財政學界では、かゝる問題が餘り研究せられて居ない現状である。私は、淺學にしてかゝる重要な問題を發表することは些か躊躇するところであるが、恩師神戸先生の御還曆を記念するため、一には我が財政學界への問題提起の意味に於いて、未熟ながら平素抱懷して居る所見の一端を掲げることゝしよう。

一 對象と認識

種々な學問上の爭なり、一見して氷炭相ひ入れない程に對立する理論も、畢竟それは、科學者が、所與たる對象の特質を充分に洞察して居ないといふ認識が、前提となり、歸結となつて居て、この間の事情を省察し吟味すれ

ば、理論上の争も、將又對立も自から解消し氷解することとなる。従つて凡ゆる科學は先づ對象と認識の問題を明確に樹立せなければならぬ。この對象と認識の問題、即ち科學的認識の方法論的基礎を省察するといふことは、その起源を批判哲學の成立に溯り得る。以前の獨斷主義哲學に對して、カントは「如何にして、科學は、一般に可能なるや」(„wie ist Wissenschaft überhaupt möglich“)の問を發せしめ、認識論は近代の先驗哲學に於いて中心問題となるに至つた。實に哲學者は、科學的方法論者の最初の人であつたと言ふことを得るのである。先驗哲學者の認識は、言ふ迄もなく普遍妥當性と必然性を要求するのであるからして、この認識はまた、各個の科學者の認識態度に重要な意義と影響を齎らすに至つた。特に、近代の批判哲學が、最近數十年間の國民經濟學、社會科學の理論へ及ぼした影響の大なることは周く人の知悉するところであらう(註)。

(註) かの有名なシュモーラとメンガーとの經濟學の方法論上の論争は、カント哲學の認識論の影響を受けたものであることは學界周知の事柄である。

兎も角、特殊科學者は過去に於いて否な現在に於ても、科學的認識の方法論的基礎付をなすにあたつては、哲學者から設問とそして或る程度まで問題の取扱方を教えられるのであるが、この教へは、無批判的に鵜呑みしてはならない。特殊科學者は、自己の狭い専門領域の事實問題を恒に顧慮しつつ、哲學的方法論者の教へに従ふことが肝要である。

或る者は説をなして曰く、特殊科學の方法論的研究は、當該科學の主題的研究では無くつて、たゞ附加的手續的説明に過ぎないと(註)。

(註) シェルティング氏の論文「マクスウェバーの史的文化科學の論理的理論及び特に彼の理念型概念」に於いて、方法論の課題は科學に於ける追加的説明であることを論じて居る。¹⁾

しかしながら、特殊科學の方法論が、當該科學の根本的前提たる、研究の對象及び認識の目標に就いての問題、即ち存在と認識する意識との關係を解明するのであるならば、かゝる方法論は決して附加的手續的なものではなかつて、根本的な諸前提が誤つて提出されて居るか何うかを判定する役割を擔ふものであり、ひいては無益な論争のために費す時間と勞力の浪費を節約するといふ重要な意義を有するものである。寧ろ科學方法論の確立を缺ぐ知識こそ、附加的手續的説明であるとも言ひ得るであらう。

以上論ずるところにより、對象と認識、存在と認識する意識の關係、現實に對する一定の根本的態度が、哲學に於いても、特殊科學に於いても、その認識目標並びにその理論的構造を廣く一般に規定するものなることが概括的ながら了解し得ることと思ふ。

このことは、特殊科學の一たる財政學に於いても同様であつて、對象と認識の問題、現實に對する一定の根本的態度の問題を缺いで居るが如き財政學も、かゝる財政學を所産せる科學者の頭腦には、この問題をば、無意識的にか、或は常識的にか前提せられて居るものである。そうでないと一片の知識すら把握するを得ないから。

かくて吾人は先づ財政學に於ける對象と認識の問題を考察せなければならぬ。

各科學にとつてその根柢をなすものは、對象と認識・現實と認識・存在と意識との關係の問題である。この問題を如何に決定するかは、更に研究せんとする科學の論理的構造を規定するものである。

1) Vgl. Arch. f. Sozialwiss., Bd. 49 S. 623-752.

凡ゆる現實・存在・對象をば、形而上學的意味をもつて取扱ふたかの中世の統一世界像が破壊失墜して以來、體驗する主觀は、それと性質を異にする世界に對立するようになった。かくて認識作用と對象との間には越ゆることの得ない深い溝が開かれるに至つたのである。この溝は如何にして橋渡するかの工作が考へられたであらうか。

デカルトに初まる近世哲學は、認識の諸原理を認識主觀そのものへ導き入れ、この主觀そのものによつて世界を構成せしめ、もつて對象と認識の間に開かれた溝を橋渡せんと試みた。

カントはこの必然的に生ずる溝をば、所謂圖式論といふ中間領域の構成によつて克服せんと試み、彼がこの問題に與へた解決は、直觀及び概念的思惟に、同等の割當と同等の意義を認識過程に於いて認め、現實(對象)は分かつことを得ない無數の斷片的諸要素から組成される連續體として解釋する認識論を建設した。この認識論に従ふと思惟が自己の諸範疇をもつて、限り無く多様な混沌界たる現實(對象)に秩序を齎らすものとするのである。實に科學の構成にとつて決定的であるところのものは、素材^{マテリアル}ではなくつて、たゞ認識の觀點に置かれて居るのである(註)。

(註) カント哲學の後繼者、西南ドイツ學派の認識論によれば、科學的智識の素材である前科學的な實在は、それが異なる方法で處理されると、そこに異なる科學の對象が成立するとする。實在をば「價值關係」(Wertbeziehung)的に取り扱ふと文化科學の對象が認識され、「價值無關係」(wertindifferent)的に取り扱ふと自然科學の對象が認識されるとする。従つて科學の對象は、實在の世界をば一定の立場からして一定の方法をもつて構成したものを指示することとなる²⁾。

吾々は、右の如き先驗哲學の認識論に立脚する多くの經濟科學者、財政科學者に屢々遭遇するであらう。

1) Vgl. S. Kracauer: Soziologie als Wissenschaft, 1922.
2) Wilhelm Windelband: Geschichte und Naturwissenschaft, 1894. Heinrich Rickert: Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft, 4. u. 5. Aufl., 1921. Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, 3. u. 4. Aufl., 1921. Der Gegenstand der Erkenntnis, 4. u. 5. Aufl., 1921.

かゝる立場よりする科學研究者の對象としての經濟なり財政は、先驗的諸範疇の助けをもつて經驗的現實から取り出された認識對象であるからして、研究者の考察の觀點に照應して種々な方法で構成される性質を有する認識對象に他ならない。このことは、各研究者の主觀性に門戸を開放し、他面、現實・存在・對象の統一的客觀的認識を斷念せるものなることを表明することとなる。この主觀主義認識論によると、三十二を下らない種々な可能的國民經濟學の諸體系が區別されると指示した學者すらある¹⁾。また經濟の完全な概念的把握は所詮斷念せなければならぬとする者もある²⁾。かくの如き體系の多樣、概念の不確定性は、上述した主觀主義認識論に立脚するかぎり財政學に於いても同様であり、そして種々な觀點からして構成された、種々な認識對象を各々有して居る諸財政學は、その何れが眞であり妥當であるかも判定することが不可能である。たゞ簡単に觀點の相違であるといふ以上には如何とも致し難い。また財政學の意味は、本質上經濟的意味に於いて、規定すべきであるか、或は政治的意味として、規定さるべきあるかに就ても、何んとも決定するを得ない。要するにこの主觀主義認識論の立場よりしては、財政學の對象を統一的客觀的に規定することは不可能な業でしかない。

對象をば統一的客觀的に規定することは結局不可能であらうか、深淵にまで深められた對象と認識・存在と意識との間の溝へ橋渡しすることを得ないか。かゝる認識論上の要求を或る程度充てくれるものは、輓近數十年前より現はれて來た對象論者（存在論者）による哲學である³⁾。この哲學は、對象そのものの存立の究極にまで遡つて對象の問題を闡明しようと企てるのである。その研究の成果は、對象の概念に結び付いて居る意識の志向性といふ純粹な根本事實から出發して、即ち意識の最も内的本質に従へば、意識は常に對象へ向けられるといふ事實

- 1) Vgl. Seven Helander: Die Ausgangspunkte der Wirtschaftswissenschaft, 1923.
- 2) Vgl. Josef Back: Nationalökonomie und phänomenologische Philosophie, Conrads Jahrb., Bd. 126. S. 225 ff. (Jecht: Wesen u. Formen d. Finanzw. S. 31).
- 3) Franz Brentano: Psychologie vom empirischen Standpunkt, 1874.
A. Meinong: Über Gegenstandstheorie, 1904.
G. Husserl: Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen

から出發して、存在と意識との間の溝への新たな橋渡しを加工しようとする。この試みに就いての偉大な業績を擔ふ者は「先驗現象學」(transzendente Phänomenologie)の提唱者エドムンドフッサアル氏である(註)。

(註) フッサアルの現象學は、世界一般及び世界に在るもろの對象の實在の最後の意味を問ふために、客觀と主觀との超越的關係を一たび純粹意識の內在的關係に還元し、純粹意識の構造を精密に分析した後、進んで對象の成立をばかゝる「先驗的主觀性」(transzendente Subjektivität)相互の共同構成作用の成果として理解しようとする。即ち一切の對象は、多様な意識の志向作用の統一點として先づ單一自我に對して構成され、更に無數の自我の意識作用の競合點として共同的に定立され、次第に客觀的實在性にまで高められるのである。フッサアルの現象學は、かくの如く、實在の根據を先驗的主觀性の構成作用に求めて居る點で、觀念論的立場を採るけれども、その觀念論は單なる觀念論に終るべきものではなく、實在より出でて實在に歸らうとする強い動向を含み、從つて、觀念論と實在論との大規模な綜合を目指して居る。(尾高朝雄著 國家構造論 三二頁)

輒近この現象學的立場を財政經濟といふ具體的問題領域に於いて取扱ふ學者が少く無い。例へば經濟學に於いてはヨオセフ・バツク然り¹⁾、財政學ではホルスト・イエヒト然りである²⁾。尤もイエヒトは現象學から意識構造の根本的分析とその分析に聯關しての對象的所與性を導き出すことを受繼ぐが、しかし所謂純粹本質として把握されるところの非存在的現實態の現象學的な實體化には與みしないと言ふ³⁾。

もとよりフッサアルの現象學自體に就いてもさまざまな難點のあることが認められて居る(田邊元博士著 哲學通論 岩波全書 一四九頁)しかしながら、對象の意味を明かにするために一應意識に還り、意識の志向作用によつて對象の成立を説き、しかも、意識と對立する對象の存在を認めようとする現象學の態度は、財政學の對象を統

Philosophie, 1922.

- 1) Josef Back: Die Entwicklung der reinen Oekonomie zur nationalökonomischen Wesenswissenschaft, 1929.
- 2) Horst Jecht: Wesen und Formen der Finanzwirtschaft, 1928.
- 3) Horst Jecht: a. a. O. S. 31 Anm. 3.

一的客觀的に認識せんと考へる者にとつては深き示唆を呈するものといふことを得るであらう。以下私は對象論（存在論）の立場より財政學の對象と認識更に本質の問題を吟味することとする。

我々の意識は、知覺するもの、表象するものとして存在をその感性的可視的現象として採り上げ得る。例へば「赤い椿」「圓い机」と言ふが如くである。また意識は直觀し、判斷し、了解するものとして、存在を「しかある」（*So sein*）ものに於いて、即ち客觀的な事物の事態（*Sachverhalt*）に於いて認識することを得る。例へば「椿の花は赤くある」「この机は圓い」と言ふが如きである。「圓くて四角な机」といふものが現實に存在しないのは「四角が圓い」といふ客觀的な事態が成立しないからであり、「赤い椿」が存在するのは「椿は赤い」といふ客觀的な事態が成立するからである。従つて凡ゆる存在にはその根柢に客觀的な事態があることを認識するのである。この客觀的事態は、即ち「しかある」（*So sein*）は存在非存在の根柢に横はる事物の本質的關係をなすものと言ふことを得る。かくて對象には二種の別を識り得るのである。一は客觀（*Objekt*）であり（例へば赤い椿）、他は客觀的事態（*Objektiv Sachverhalt*）である（例へば椿の花は赤い）。客觀は存在（*Existenz*）であり、客觀的事態は成立（*Bestand*）である。

吾々が財政學の對象を統一的客觀的に認識せんとするには、その對象を客觀的事態に求めなければならない。しかしこの事態なるものは、前に例を舉げて説明したように、現實の存在と無關係にあるのではなくつて、常に現實の事實によつて基底づけられて居る（*fundiert sind*）といふことを看過してはならない。

以上述べたところで財政學の對象と認識の關係は明かとなつたと思ふ、しからば財政學の對象が屬するところ

の存在の領域は何處にあるであらうか。精神界か將又自然界か。

二 財政學の對象の領域

財政學なり經濟學の對象が、若し精神界に屬せずして、自然界といふ領域に屬するといふ者があるとするれば、人必ずや奇異の感を迎へるであらう。ところが過去に於いて現在に於いても、これ等科學の對象が自然界に屬するといふ取扱をなす者が多々ある。それは所謂心理主義に基く財政學者、經濟學者である。

財政なり經濟は、言ふ迄もなく人間活動の世界であり、精神界の領域に屬するものである。その根據に就ては先づ對象が自然界に屬する場合と、精神界に屬する場合とは、どの様に認識作用上、ひいて、認識の手段たる論理の上に相違を齎らすかを闡明して後、論述することとしよう。

自然的存在は、感性知覺によつて認識され、それをば個々の諸要素に分解し分離的に取扱ふことは、空間に與へられたる事物の (Sachin) たる本質に矛盾するところがない。例へば水を H_2O に分解して、水は水素二分子量と酸素一分子量よりなるとして取扱ふが如きである。また、諸要素に分析したものに於いての或る特徴を抽出して、他の徵標を捨象し、もつて「普遍的なるもの」を求めるといふ綜合概念たる「類概念」(Gattungsbegriff) の論理が用ひられる。これ蓋し自然的存在自體は、沒意味的な存在であつて、非聯關的であるといふ對象の性質に規定せられる當然の論理形式である。例へば水に攝氏百度の熱を加へれば蒸發して氣體となり、これを零度以下に冷却すれば、氷結して固體となるといふ化學命題の定立には、その背後に個々具體的な水の蒸發と冷却といふ多

くの實驗的事實に聯關して居り、自然的存在たる水自身には、かゝる聯關性は無い。そして水は、分析して水素二分子量と酸素一分子量よりなつて居るといふが、何故に然かるかは不明で、たゞ「ある」から「ある」と言ふ他はない。これ沒意味的存在であるからである。單に「ある」から「ある」と言ふ如き存在の認識手段は、「ある」存在を分析し、これの他の「ある」存在と聯關せしめて綜合し、もつて普遍妥當の法則を定立するに盡きる。

ところがこの自然的存在を素材とし、これに或る「意味」が與へられると、そこに精神的存在が成立される。

精神的存在は、素材的には、自然的存在の制約を受けて居るが、本質的には、自然を素材として自分を定着せしめて居る「意味」に制約されるのである。この精神的存在の「しかある」(so far as) 即ち精神的存在をして、精神的存在たらしめるところの意味は、本能や衝動による無反省、無自覺的な反射的意識とは反對なる反省自覺による意識の作用により統一的に構成されるものである。このことは、精神の中核をなす意味には、意味を構成せしめる面と、構成された意味自體の面とがあるといふことを指示する。意味を構成せしめるものは主觀の意味であり、この意味を中核とする精神は主觀的精神である。而して構成された意味は客觀の意味であり、この意味を中核とする精神は客觀的精神である。この客觀的精神と主觀的精神、客觀の意味と主觀の意味との關係はどうかといふに、意味を構成せしめるといふ意識の流動性、體驗の特質性による主觀の意味により客觀の意味の内容が更新される、即ち客觀的精神は絶へざる主觀的精神の作用によりて更新せしめらるる關係にある。しかして、第一義的に認識されるものは、主觀的精神であるか客觀的精神であるかと言ふに、それは客觀的精神であつて主觀的精神ではない。語られた言葉、印刷された文字、爲された行爲、描かれた繪畫等、既に客觀化された意味内容を有す

る客觀的精神である。我々はこの客觀的精神の了解を基礎として、更にその背後に躍動する主觀的精神を認識せんとつとめ勝ちであるが、限り無く多様に流動する主觀的精神は、決して科學の嚴密な對象とはなり得ない。科學の對象となるものは、主觀的精神が何等かの形で客觀化された限りに於てのみである。實に精神科學の認識の對象は客觀的精神なのである^(註)。

(註) 主觀的精神と客觀的精神に就ては、(尾高朝雄著 國家構造論 一一〇頁以下參照。及びディルタイの書參照¹⁾)。

而してこの客觀的精神の認識は、感性知覺を超越した客觀的意味の直觀によつて認識される。これ蓋し前にも述べた如く、この客觀的意味は、多様な意識作用を自己に於いて統一して居る存在であるからして、この統一的存在を何等かの部分に分解することは、「意味」を尋ねて「無意味」を得るといふ結果になるからである。實に客觀的精神(精神的諸形象)は、一の統一的意味構造の諸形象であるからして、その諸形象をば、その諸要素に分析することは、その形象の本質を形成する統一的な意味核心を喪失することなしには不可能である。かくの如く精神的存在に於ける認識の作用は、その存在の客觀的意味を直觀するにありといふことからして、認識の手段たる論理的形式にも、自然的存在の場合とは異なる方法が行はなければならない。それは統一的な存在として、即ち全體として初めて、意味を擔ふ精神形象(客觀的精神)に「普遍なるもの」を求めるといふ概念構成の形式である。この概念的認識の手段は、マックス・ウェバーにより方法論的に基礎付けられた理念型的取扱である。²⁾

理念型 (Idealtypus) は、散亂して居る諸特徴を總括することではない。多様な精神的事實現象の通有性的平均概念 (Durchschnittsbegriff) でもない。寧ろ對象の特性を鮮明に浮きたたすため、精神的存在をばその意味とい

1) Vgl. Dilthey: Gesammelte Schriften, Bd. VII.

2) Vgl. Max Weber: Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre u. Wirtschaft und Gesellschaft, 1922.

ふ理念に於いて矛盾なき像 (zu einem widerspruchlosen Bilde) 高めることである。詳しく言へば、精神現實態 (精神的存在) をば、その共通的な客觀的意味中核に於いて、即ちその理念に於いて把握することである。かくて、理念型は、類的及び類型的諸特性を呈示するものであるからして、直觀的であると同時に普遍的であることを得る¹⁾。

更らに吾々は精神現實態を吟味してこの理念型概念を説明するとしよう。

吾々は、具體的に現實的に與へられて居る精神形象たる歴史的に變化し、社會的に制約せられる精神現實態から、意識自體の一般構造と共に與へられる究極的合法則性によつて要求せられる「理性的に自明なるもの」、即ち純粹な客觀的意味を取り出すことが出来る、このことを逆に言へば、究極的な意識作用の相關者たる客觀的精神に、凡ゆる歴史的特殊化、充實化、社會的制約化の核心として働くところの不變的恒存的な純粹な客觀的意味を考へ得ると共に (註二)、この不變性、恒存性をもつて居る純粹な客觀的意味の現實の姿は、この意味の内面に躍動する限り無き多様と變化をもつて居る意識作用によつて變容されたものとなつて居る。従つてこの變容された現實の姿の客觀的意味には、不變性の裡に可變性を、可變性の裡に恒存性を宿し、變化せざるものの變化、すなはち歴史性がある。また客觀的意味の内面で躍動して恒に意味を基底付けて居る意識の作用は、社會的存在が個人的存在に優先して居るといふ事實よりして、社會的意識によつて制約されて居るものなることを確認し得る。この確認は、被基底付者たる客觀的意味の社會性を物語るものである²⁾。

かくて精神現實態には、意識構造自體よりして與へらるゝ不變性、恒存性をもつ純粹な客觀的意味と、歴史性、

1) Horst Jecht: a. a. O. S. 42 ff.

2) Vgl. Scheler: Die Wissensformen und die Gesellschaft, Leipzig 1929, S. 248.

社會性を擔ふ具體的な客觀的意味とを認識し得る。かゝる性質をもつて居る精神現實態から恒存的不變的な純粹な客觀的意味を理念として、或は本質概念として、歴史的社會的な客觀的意味を把握しようとする精神科學的認識手段が理念型である。この理念型概念は精神現實態をば矛盾なき像に於いての認識手段であるが、しかし、眞の現實態は矛盾に満ち、歴史はこの矛盾を契機として生成發展するものであるからして、動的に現實態を認識するには、理念型概念と矛盾する概念を許しつゝ矛盾を越へて不斷の綜合に進むといふ動態の論理たる「辯證法」(Dialektik)を必要とする(註二)。

(註一) 私の所謂「純粹な客觀的意味」をば、シェッランガーは「覆ふはれたる合理性」(eingehüllten Rationalität)と言ひ、これは、非時間的理念型(Zeitlose Identypen)により把握さるゝこと²⁾。ネオトルの所謂「事實以前の科學理論」(Theorie vor den Tatsachen)の課題は、意味形成の原始形式(私の所謂純粹な客觀的意味)を凡ゆる意味現實態の不變な核心として曝露することであるとイエヒトは言ふ³⁾。

(註二) 辯證法といふ論理は、自然科學にも認めなければならぬとする者あるも茲では論議を差し控へる。

以上私は、存在が自然的存在であるか、精神的存在であるかによつて、認識の作用が異なる所以を述べた、自然的存在は感性知覺により、精神的存在は直觀により、而してこれが認識の手段たる論理の形式は、前者に於いては、全體との聯關を顧慮せず、分離的に部分を分析し、また綜合の一方法としては類概念をもつてすることを得、後者の場合に於ては、諸部分内容は對象全體に於て最初から全體と構造的に聯關して意味ある單一の全體をなして居るからして、特に直觀的であると同時に普遍的である概念形成として純粹な客觀的意味の規定たる本質概念並に理念型乃至辯證法を明にした。即ち自然界を研究對象とする自然科學には、それ特有の、精神界を對象

1) Vgl. E. Spranger: Lebensformen S. 71.
2) Vgl. E. Spranger: a. a. O. S. 114.
3) Vgl. H. Jecht: a. a. O. S. 45.

とする精神科學には、それ特有の、論理形式のある所以を闡明した。従つて吾々は、論述の順序として、財政が「精神界に屬する根據を説明せなければならぬ」。

財政とは、權力團體の名に於いてする人間の經濟行動であるといふことを得るであらう。そうであるとするれば、「人間の經濟行動」といふことだけをとり、この行動が、精神界に屬する行動である所以を吟味すれば、明かに財政學は精神科學として攻究せなければならぬことを識り得るわけである。

從來所謂「欲望理論」に基く經濟學が、經濟の本質として説明するところは次のようである。人間の生物學的に基礎付けられた物質的な缺乏感覺の循環及びそれから生れるところの缺乏感覺の充足への努力を、人間の存在と共に與へられるといふことを事實として指示し、そしてその裡に經濟の本質を認める。即ち利他的衝動的に生ずる物的缺乏感覺を反射的に除去して、この感覺から解放されるといふ單なる反應的態度をもつてする。曰く、經濟とは物的欲望を充足する行爲であると。若し經濟とはかようなものであるとするならば、犬猫猿等々動物一般もかゝる行爲を日常なして居るのであり、かゝる經濟の本質規定では、人間の經濟一般にとり本質的であるものがなほ未だ觸れられて居ない。たとへ缺乏感覺に訴へこれを充たすといふ作用は純粹な人間の内的現象であつても動物の心理作用と何等擇ぶところなく、それは意味なき心理作用で、精神界に屬する現象ではなく自然界に屬する現象である。従つてこの派の論理の形式は自然科學的であることは勿論である。

この經濟學の「欲望理論」より出發して、財政現象を取扱ふ學派がある。所謂純理財政學を提唱する人々これに屬する。¹⁾ この學派の人々は、國家公共團體の財政的行動は、主觀的欲望及び團體從屬者の價值評價により行は

1) Sax: Grundlegung der theoretischen Staatswirtschaft. Lindahl: Die Gerechtigkeit der Besteuerung. Ritschl: Theorie der Staatswirtschaft.

れるところの現象過程とする。¹⁾

かかる財政的取扱は、つぎの難點を克服することを得ないで理論的崩解に陥る。

一、欲望なり主觀の擔手は體驗活動の中心をなす個々人で、全體としての國家公共團體では無い。

二、國家公共團體の生成發展といふ歴史的現實に鋭く矛盾する。國家公共團體は單に主觀的欲望に依つてではなく、寧ろ主として權力と征服といふ契機に因つて生じたものである。

三、一步譲つて、國家公共團體は共同欲望の擔手であるとしても、凡ゆる欲望は歴史的且つ心理的に生じたるものである。²⁾ 従つて凡ゆる時代に妥當する財政の意味、即ち財政の本質をば、歴史的且つ心理的に變動する共同欲望の分析からしては得られない。たとへ或る時代の共同欲望が團體員の大部分に是認されたとしても、由來欲望なるものは、肉體的精神的感覺の個人的拘束に支配せらるゝものなる故不確實曖昧性が依存として残る。

要するに欲望理論に基く財政學は、初めから現實性を缺ぐところの純粹疑制の諸前提に基いて組み立てんとし、最初から救ひ難い現實からの遊離に陥つて居るのである。

しからば、精神現象としての經濟現象をして、經濟現象たらしめる經濟の本質とは如何なるものであらうか。歴史的に社會的に與へられて居る經濟は、資本主義經濟社會といふ類型により把握し得る。いま、この資本主義經濟社會といふ精神現實態の類型に於ける純粹な客觀的意味たる經濟の本質は何かと言ふに、それは人間の存在、即ち生活を維持し、これを促進するといふ理念よりして、生活の手段を欲求し、この欲求は現實に調達し得る充足手段の總量と對比されて、主觀的な意味を有して居る欲求は、對象的な大さとしての客觀的意味を有する需要

1) Jecht: a. a. O. S. 65.

2) Vgl. Scheler: Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik, 3. Aufl., S. 363 ff.

となつてこれを生活に充當するといふ行動をなす、即ち需要と充當の行動こそ經濟の本質をなすものといふことを得るであらう(註)。かゝる生活行動の各過程に於いては、勿論飢餓、渴等々の衝動の支配を受ける様に見へるがしかしこの衝動を統制し、規定するものとして、未來への生活に對する配慮的斟酌意識の作用がある。

(註) ゴトルによると、經濟とは欲求と調達との持續的調和といふ精神に於いての人間共同生活の構成である(福井孝治著 生としての經濟 一〇六頁)

以上私は、存在論の立場よりして、財政學の對象の屬する領域とその認識の手段たる論理の形式を明にして來た。しからば、財政學の最初の問題であり、最後の問題でもある財政の本質は如何に説明さるべきであるか。

三 財政の本質

歴史的、社會的に制約されて居る財政現實態(資本主義國家財政なり社會主義國家財政)に於いて、この現實態をして成立せしめて居る意味核心、即ち財政の本質は、「權力的な經濟行動」にありといふことを得るであらう(註)。

(註) 財政學の對象を最初に作り出した歴史學派の、ローレンツ・フォン・シュタインは、財政の本質を「第一に國家的政治的現象として特徴付け」また同學派のアドルフ・ワグナーは、公經濟の決定的特徴を國家の強制的適用の事實にありとしたことは、權力作用が財政の本質として不可缺のものを示すものである。¹⁾

財政の本質が一の行動であるとする、そこには行動の目標があり、行動の主體がなければならぬ。行動の主體は、權力團體であり、その目標は、國民生活の維持、促進にありといふことを得る。何故に、權力團體は、國民生活の維持促進のために、權力的な經濟行動をなさねばならぬか。

1) Vgl. Jecht: a. a. O. S. 57.

人は、まづに經濟の本質を問題としたところで述べたように、自己の存在を維持し促進するといふ意欲の擔手としてその手段を欲求し、この欲求は現實に調達し得る充足手段の總量と對比せしめて、欲求を需要に對象化さしめて、これを充當するといふ行動をなすものであるが、元來意欲は限り無きものであり、これに對立して調達し得る手段は、絶對的に(例へば資源の實在高)將又相對的に(人間の資源開發に就ての智識技術と關係せしめての資源有高)有限であるといふ事情に置かれて居る。かくて人は生活に對して充たされざるものをもつて居る存在である。この生活に充たされないものをもつて居る人類は、先づ母の子に對する愛と子が母への思慕の情とを中核として、血縁を紐帶とする社會的たる母系氏族共同社會を形成し、時に充たされざる生活の要求を契機として、他の血縁を異にする氏族共同社會の人々と鬭爭し征服して、彼等の支配する生活手段を奪ひ、或は人が自己の存在を維持する以上の生産力を發揮することが出来るようになっては、捕虜を奴隸として使役したことは歴史の示すが如くである。

この人類最初の母系氏族共同社會も、農耕の經濟が、社會生存の基本的生産形態となるに及んで、同一地域に住居して居るといふ意識、更に同一の言葉で話し合ひ、同一の理想を抱き、同一の運命に置かれて居るといふ同情、同感が紐帶となつて次第に共同社會の外延は擴大され、今日見るような國民共同社會が現出するに至つたのである。

しかしながら、本來、生活に充たされざる存在者たる人と人との社會的な事實關係は、血縁を異にし、或は血縁を遠ざかるに従ひ、生活手段に於いて充たされざる情感は、不満となり争ひといふ形をとつて紛議を醸すこと

が次第に多くなるとは當然の成り行きであり、紛議、鬭争の極は共同社會そのものゝ分裂崩壊に導く危険をもたらすものとなる。かくてこの紛議なり、争を共同社會存立の名に於いて實力をもつて解決する必要が起つて来る。これ權力の發生である。この權力の行使に當つて多數の人を或る組織のもとに動員する場合、その動員の組織者を權力者と言ひ、組織によりて動く全員を權力團體といふのである。

従つて權力團體は、共同社會の存立を基礎として存在するものであり、このことは、共同社會構成員の生存の維持促進、すなはち、國民生活の維持、促進を目標としこれを指導原理として行動するわけである。かく行動せなければ權力團體は勿論、この團體の基礎者たる國民共同社會自体も分裂崩壊の危険に曝らされる運命に陥る。

以上の如く考察してみると、財政の本質は「權力的な經濟行動」なりといふ意味は、敷衍されて次のやうに言ひ得る。

財政とは、權力團體が國民生活（權力團體の基礎者たる共同社會構成員の生活）の維持、促進をはかるための需要を如何にして權力的に配分するか、又この需要の手段を如何にして權力的に調達するか、の行動である」と言ひ得るであらう。この權力團體の需要を如何にして權力的に配分するかの問題は、言ふ迄もなく、この需要を如何にして權力的に調達し得るかの問題と關聯せしめて、この調達の問題は一應解決されたるものとして考へられるのである。さもなければ、對象的大さを有するものとしての客觀的意味をもつて居る權力團體の需要と言ふことを得ずして、たゞ權力團體當局者の抱く主觀的な欲求に過ぎないからである。このことを留意して、この需要配分の問題を吟味すると、基礎者たる共同社會内の凡ゆる生活單位の需要の維持、促進といふ生活狀況との全關聯に於

いて需要の配分を決定せなければならぬといふことが確立せられ得る。^註

(註) ゴッタルに依ると需要と充當との均衡は二つの方法、即ち需要を状況に適合さすこと、状況を需要に適合さすにありと言ふ。¹⁾

この需要配分の基礎的な要請原理よりして、權力團體の基礎者たる共同社會内の凡ゆる構成員に對して先づ生理學的に必要な「最低生活費」 („Existenzminimum“) への需要配分が生れる。かの所謂社會政策費とか社會費と稱せられるものは多くこの配分を指示する。また共同社會の生活一般を維持するには、共同社會の秩序維持、外敵への防衛の需要に對して手段が配分されなければならない。これ等の生活維持への諸需要が配分されて、しかも尙ほ需要充當への手段に餘裕ある狀況に於ては、生活維持といふ消極的態度より、生活促進といふ積極的態度に移行して需要充當の體系が組織されることになる。

次ぎに權力團體の需要を如何にして權力的に配分するやの問題の相關者であるこの需要の手段を、如何にして權力的に調達するやの問題を考究するとしよう。

需要手段の調達方法として始源的なるものの第一は、權力團體自から生産して、これを需要に充てるか、或は生産物を一應販賣して得た手段 (例へば貨幣) でもつて、充當することである。かゝる調達方法は、普く私經濟の行ふ調達手段と本質的に變りはないとして、從來の財政學では、所謂私經濟的收入として取扱ふところであるが、しかしかゝる調達方法を執行する主體が、權力團體なる限り、その基礎者たる共同社會の生活一般にとり、その執行を私經濟に委かせるよりも、特に權力團體をしてなさしむる方が、より合理的であるといふ根據に基くものと解せなければならぬ。而して、權力團體の商品價格は、獨占價格の原理でもつて、時には間接稅的性質

1) Vgl. Gottl, Wirtschaft und Technik im Grundriss der Sozialökonomik, II, 2, 2. Auf., 1923, S. 11.

をもつて決定され、決定された値段は、購買者にとり強制的であることを考ふると、決して權力作用が介在しない私經濟的調達方法と言ふことを得ない性質のものである。

つぎに需要手段の調達方法として始源的なるものの第二としては、權力團體の信用を媒介とする巨額の債務の設定である。人は、またこの調達方法も本質上私經濟の債務と異なるところ無しとするものがあるが、しかしながら何億何百億と言ふ公債の可能は、私經濟的團體に於いては考ふるを得ないところであり、權力作用を行使する實體としての團體にして初めて可能であると言はなければならない。そうすると權力團體の債務も一つの權力的調達の一種として考ふことを得る。

需要手段の調達方法として、權力團體にとり固有的なものとしては、共同社會構成員より強制的に調達する方法である（例へば貢納・課税）。需要手段の始源的調達に際しては、共同社會内の生活一般の維持促進に適合さすように權力の發動を期すべきであり、固有的調達に當つては現存の經濟制度の調整、發展へ向けらるべきである。

結

言

以上私は、財政學の對象としての純粹な客觀的意味、普遍的且つ超時代的な財政の本質を考察したのであるが、この客觀的意味、即ち財政の本質に社會的、歴史的規定が加へらるることにより具體的且つ現實的な財政の類型が把握され、この類型概念が、この類型に包攝されて居る純粹な客觀的意味、即ち本質概念と矛盾する場合、その姿を、生成 (Werden) の過程に於いて摺むと、其處に現實財政の動く方向が指示され得る。